「ヒマラヤの自然の聖地　その2」 ～ブータンの八百万の神々～

小林尚礼

登山仲間が遭難した山がチベットの神山（カワカブ／梅里雪山）であったことから、ヒマラヤ・チベット地域の自然信仰の聖地を訪ねるようになりました。大きな聖地を訪れると、‘人間の力を超える何か’を感じます。それは、宇宙や生命の起源を想像するときの「畏怖」にも似た感覚です。多くの聖地を巡りそこでの祭礼を見るうちに、「聖地とは、神（または宇宙の摂理のようなもの）を感じられる場であり、そこで祈ることはその摂理とつながるためではないか」と思うようになりました。そんな視点から、「ヒマラヤの自然の聖地」を歩いた記録を紹介します。

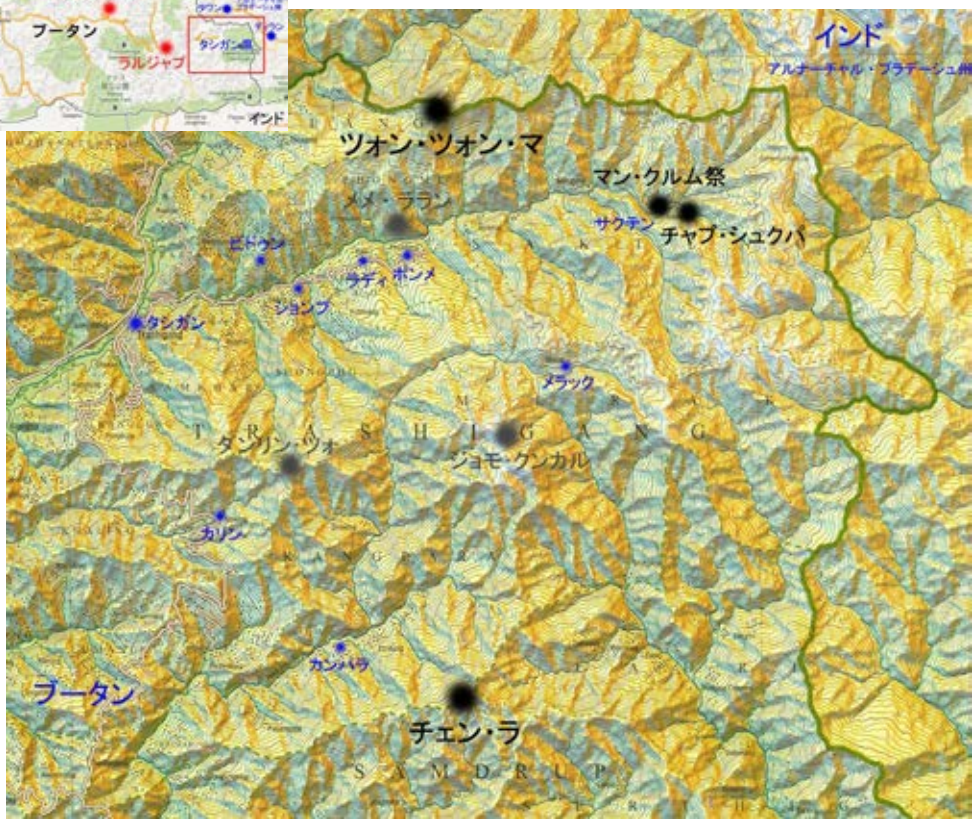
国全体が山岳地形で、そのほとんどが森林に覆われたブータンには、自然信仰の聖地が数多くあります。わずか 4 ヶ月の滞在で訪ねた場所は十数か所に過ぎませんが、それでもタクツァン（岩壁、パロ）、ラルジャプ（洞窟、モンガル）、メンバル・ツォ（川の淵、ブムタン）、ダンリン・ツォ（湖、タシガン）など、さまざまな形態の聖地がありました。そのような土地には神話が伝わり、人々の畏敬の念を集めています。ブータンにも、八百万の神の世界があります。

山岳民族ブロクパが暮らすブータン東部タシガンの山岳地帯には、山の聖地が多くあります。「ツォン・ツォン・マ」山は深い森と岩壁に囲まれて、チベットから落ち延びた鬼神が宿り、土地の守護神として宿るといいます。山麓の人々は、年に 1 度山頂を参拝します。「チェン・ラ」山はなだらかで楽園のような雰囲気をもち、チベット仏教の開祖グル・リンポチェの伝説が伝わる仏の山です。いまでも、僧侶が瞑想修行のため山頂近くにこもります。以前紹介した女神の山「ジョモ・クンカル」や、急峻な岩壁を巡礼する「メメ・ララン」も、タシガンにあります。

同じくタシガンの「チャプ・シュクパ」は、深い森のなかに奇妙な形の岩が点在する岩の聖地です。サクテンの村に暮らす山岳民族ブロクパが参拝にやってきます。そのサクテンでは、「マン・クルム」という祭りが 3 年に 1 度行われます。タンディン・ヤブユムという男女一対の土地神が降臨して、村の厄を祓い清めてゆきます。5 日間続く祭りの最中には、ドクロの仮面をつけた素っ裸の男たちが村を練り歩く秘儀テル・チャムも行われます。

厳しい自然に生きる人々が聖地で祈る内容は、災害や病から身を守ることが中心になります。聖地へ祈ることは、自然とともに生きる人々の災害対策といっていいかもしれません。その根底にあるものは、聖地という特別の場所で人智を超える「普遍的なもの」とつながり、その摂理に従い加護をえるという意識ではないかと思います。

←タシガンの位置（google map）



タシガン内の聖地 （ブータン農業省 Department Survey & Land Records(2006) 1:250,000)

タクツァン

ブータン西部の町パロのゆるやかな谷に突如、大岩壁が出現する。そこは、チベット仏教の開祖が虎に乗って飛来したという伝説から、現地語でタクツァン（虎のねぐら）と呼ばれる。一帯は聖地と考えられ、いくつもの寺院が建立されている。岩の形や模様にはさまざまな物語が与えられ、多くの巡礼者が集う。300年以上前、断崖中央の岩棚にどのように建物を建てたのか。自然の驚異へ祈り、和合しようとした人々の思いを感じる風景だ。

ラルジャプ

ブータンはどこまで行っても山また山だ。正真正銘の山国であり、多くの聖地が隠されている。山の向こう側という意味のラルジャプは、東部のモンガル県に位置する知られざる聖地。岩場が点在する急斜面に二つの寺と洞窟があり、無数の祈りの旗がはためく。ここは、ある高僧が虎に導かれてたどり着いた場所だという。人里から離れて静寂に包まれた地には、今も多くの修行僧が瞑想（めいそう）するためにやってくる。

メンバル・ツォ

ブータン中央部のブムタンの谷に、メンバル・ツォ（炎が燃える湖）と呼ばれる深いふちがある。巨大な岩塊を、水流が長い時間かけて幅数メートルの回廊状にくりぬいたところだ。回廊の上には祈りの旗とともに木の橋がかけられ、橋から水面をのぞきこむと足がすくむ。伝説では、灯明を手にした高僧がこのふちに飛びこんだとき炎は消えることなく、僧は宝典を手にして戻ってきたという。自然の見事な造形が神話を生みだす。

メメ・ララン

ブータン東端を流れるガムリ川の両岸には、広大な棚田が続く。大岩壁をいだく山ララン は、そんな穀倉地帯を見下ろすようにそそり立っている。土地神と考えられ、現地語でおじいさんを意味するメメと組み合わせ「メメ・ララン」と親しみをこめて呼ばれてきた。人々は800メートル下の谷底まで切れ落ちる岩壁に踏み跡をつけて、そこにある奇岩や清水に宗教的な意味を見いだし、危険とも思える参拝を続けてきた。「なぜそこまで」と思うが、恐ろしいと思うとき、自然に対する感覚が鋭敏になることは確かだ。

ツォン・ツォン・マ

東ブータンとインドとの国境に、ツォン・ツォン・マ（高い高い母の山）と呼ばれる霊峰がそびえる。チベットから来た鬼神が宿り、土地の守護神となった山だ。ふもとの人々が参拝するという頂へ3日かけて登ってみた。亜熱帯の森、毒蛇と無数のヒル、急なヤブこぎ、高山病……。頂上直下ではついにぬれた岩に阻まれて撤退。この土地の人々が畏怖（いふ）する自然を存分に体感することになった。山頂下部にはお堂があり、僧侶が瞑想（めいそう）に訪れるという。

チェン・ラ

チェン・ラ（最も高い山）はブータン有数の仏教修行の地だ。今でも僧が登り、頂上直下の洞窟小屋＝写真右上＝にこもって瞑想（めいそう）する。標高は4000メートルあるものの山容はなだらかで、頂まで緑に覆われてイブキトラノオなどの高山植物が咲き誇る。この仏の山は、鬼神が守り神として宿る峻険（しゅんけん）な霊峰とは雰囲気が違う。不気味な恐ろしさはなく、優しく気高い。同じ信仰の山といっても、形や険しさによって宿る主が変わる。

マン・クルム

ブータン東部の山村サクテンには、3年に1度だけ開かれる祭りがある。そのテル・チャム（宝の舞）では、土地の守護神タンディンの仮面をつけた人が、裸の村人とともに家々を回ってゆく。古式にのっとった舞を奉じて、悪霊を退散させるのだ。この儀式をすると、次の3年間に災害や病苦が減るという。自然の神を畏れ、災いをイメージすることが、森羅万象に耳を澄ますことにつながるのだろうか。

チャプ・シュクパ

標高4000メートル前後の深い森の中に、不思議な形の岩が点在する。ブータン・タシガン県のチャプ・シュクパは、現地の人だけが知る岩の聖地だ。「チャプ」は祈り、「シュクパ」は葉を香にするヒノキ科のビャクシンを意味し、一帯は神聖なシュクパに覆われる。浸食や風化を受けたいくつもの石は、サイの角＝写真手前＝や高僧の足跡、宝物などさまざまな意味をもつ。訪れた人々は一つ一つの物語を想像しながら、楽しげに参拝していた。